思うがままに ③

耐寒訓練

和田　明

高知県高等学校体育連盟登山専門部は、参加校男子、高知工業・追手前・土佐・西の4校、女子は、土佐女子・西・追手前の3校である。

平成9年まで、冬期登山技術研修会として、天狗高原で、山岳連盟・高体連・県警の47名参加を最後に、高体連は、引き続き天狗高原で、スキー班と登山班に分かれ1泊2日で、耐寒訓練が行われている。岳連は、鳥取大山に移し、10内外の参加で1泊2日で開かれている。

岳連は、昨年に続いて、遭難対策研修会を開催した。今回の雪崩事故は、山岳連盟・高体連・県警に、事故防止の対策強化を求めるであろう。

2015年1月、白髪山で、遭難事故が起きた。推測すれば、30代若者3名は、光石登山口を10時に出発、カヤハゲに13時に着き、三嶺を目指したが、積雪のため、白髪避難小屋に向い、雪の中のアップダウンに体力を奪われてやっとの思いで5時にたどり着き、楽しい一夜を過ごした。山行は、午後3時には終えたいものである。16日朝は、吹雪、思わぬ積雪、昨日たどった雪道は消えている。それでもラッセルをして光石に向うか、生越えか、白髪山に向えばさほど問題はない。避難小屋から、林道登山口への下山は、避けた方がよい。

携帯電話の無い時代は、いやでも自力下山しなければならない。四国の冬山でも、侮らず、無雪期に何度も登り、山を知ること。栃木県高体連専門部の猪瀬氏の言う、「経験則」は、まだ自然から比べると、劣勢であった。

報道では、「ビーコン」を持っていなかったとあるが、全国の高体連にどの程度普及しているだろうか。

私は、赤・黄のビニールテープを腰に巻き、吹き流しのようにして、呼笛を持ち、雪山をラッセルした経験しかない。

白髪・山嶺尾根コース

先達の教えから 憲法への道のり

2

飯田　清久

第三次安倍内閣が発足しました。記者会見で、安倍首相が8秒間頭を下げた映像が映し出されました。騙されてはいけません！今までの憲法破壊の数々を忘れてはいけません！改憲のためなら何でもやる姿勢の一環に過ぎません。

先日テレビの特集で、保育所に入れない母親のインタビューを聞きました。「子育て支援より高齢者福祉のほうが手厚いように感じる。これから社会を担う世代への支援をもっと充実させてほしい」という趣旨でした。本当に困っている切実さとともに、福祉分野における分断政策が進行していることを感じました。新自由主義による政策は、福祉サービスを徹底的に商品化する一方、公的責任を放棄し自助・共助の名による自己責任・家族責任の風潮を作り出しています。メディアが盛んに取り上げる「家族」「絆」などのキーワードに、裏の意図を感じるのは私だけでしょうか。

「障害者を締め出す社会は弱くもろい社会である」「障害者を生み出す最大の要因は戦争である」。これらは1981年の国際障害者年と国連障害者の10年の時期に示された指針です。またその頃高知では、障害者の生活と権利を守る高知県連絡協議会が「やさしい障害者問題」という冊子を発行しました（編者　宮川敏彦氏）。教員になりたてだった私はこの冊子をとおして、自分の仕事と平和、民主主義そして憲法とのかかわり方を、体感的に学んだ記憶があります。「平和の問題や障害者問題をはじめ日本の社会にある問題と格闘しながら、私たちはみんなで歴史をすすめている。その道をたどっていくことは、日本に本物の民主主義を育てていくことになる（前著要約）」。日本国憲法という山の頂をめざす道はいっぱいあります。一人ひとりが自分の道を見つけ、頂をめざし民主主義という道のりを歩んでいくイメージを掴みとった気持ちでした。私にとっての名著となりました。

人類は長い年月と幾多の闘いをとおして人が人として生きていく営みを、施しや救貧対策から保護へ、さらには人間らしく生きる権利へ、そしてその最高位としての人権＝生存権にまで高めてきました。本来福祉分野の不均等は、低位での比較でなく高いレベルに合わせる論議が大切だと思います。児童も高齢者もそして障害者も、どれも大切で切実な人権問題であることは言うまでもありません。

私は、中年と呼ばれる年になった頃から障害者問題をとおして、私なりの憲法への道を歩むことをライフワークとするようになりました。浜松との二重生活を送っている今も、高知ではふたつの障害者福祉事業にかかわっています。ひとつは、現職時代からかかわりを続けてきた保護者が立ち上げた「open heart」という障害の重い人たちの通所施設。高知市弥生町の地球33番地モニュメントの真正面にあります。もうひとつは、わが高退協の会員でもある井上芳史氏が中心となって立ち上げた「視覚障害サポートステーションこうち」という団体。こちらは高知市旭駅前町に「てとてあさひ」という視覚障害支援事業所を開設し、あんま・マッサージや点字印刷の活動を始めています。どちらも機会があったらちょっとのぞいてみてください。

未来つくる　心ひとつ　日本母親大会

2018年の夏は高知開催

「南国土佐でまっちょるきにね」

川村　喜美

高知の蒸し暑さとは打って変わって、秋のような涼風吹く盛岡市で、8月19・20日に第63回日本母親大会が行われました。岩手大会で日本母親大会として初めてのことが3つありました。1つめは来賓として岩手県知事と盛岡市長が二人とも参加してくださったこと。（開催の県と市の長が共に参加したのは初めて。）2つめは生協農協女性部が実行団体として加入し、共に準備段階から大会成功の為に努力してきたこと。3つめは岩手県の全市町村、教育委員会が日本母親大会の後援となったこと。すごい！その成果か、2日間でのべ10700人が参加し、賑やかでパワフルな大会となりました。地元新聞にも見開きの2ページジ全部を使って日本母親大会の記事がカラーで掲載され、地元にも浸透していることが実感でき感激しました。

来年は高知開催と言うこともあって、高知からは予定40人を大きく上回る54人が参加しました。高知からの全体発言としては「子ども食堂の取組」が報告され、その中で子ども食堂の担い手が広がっていることと高齢化しつつある現状を「今が一番若い！できることをどんどんやっていこう」と全国の参加者に呼び掛け、大歓声を受けました。大会の最後には来年の高知開催の案内を高知からの参加者全員でよさこいを踊りながら、元気いっぱいにアピールしました。

（4面に続く）